

Title	西ドイツ中世における“Bauerntum”の形成：Codex Laureshamensisを中心として
Sub Title	Formation of "Bauerntum" in "Westdeutschland" : especially based on Codex Laureshamensis
Author	宇尾野, 久
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.10 (1955. 10) ,p.785(47)- 800(62)
JaLC DOI	10.14991/001.19551001-0047
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19551001-0047">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19551001-0047</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「還れ」といつて婦人労働者を解雇する。そしてこのような見地は、ブルジョア社會が妻の公然または隠然たる家内奴隸制の上にきずかれています。單婚家族をその構成部分としているかぎり、資本家の念頭を去らない。ヒットラーの三K (Kind, Küche, Kirche 子供、臺所、教會) 理論は、資本家のこのような政策を裏づけるものであり、しかも戦争準備の一部として婦人を兵士の妻と母の役目におとしめようとする望む者を手助けするものであつた。

とにかく、このような結果として、自分の労働力を賣らざるをえない多くの婦人大衆は潜在的過剰人口と同じような失業状態におかれ、また、家内労働に従事する停滞的過剰人口として半失業状態におかれる。しかもさらに下層は浮浪者、賣春婦となるのであつて、まさに「婦人の賃労働の背後には賣淫という暗い影が立つてゐる」。

資本家は、このように相対的過剰人口のなかでたえず増大する婦人失業者および半失業者の壓力を利用して、婦人労働は家計補助的労働であるとか、産前産後の休暇で労働が中断されるとか、その他いろいろな理由で、婦人の賃金を労働力の價值以下にとくべつ低く壓し下げる。こうして、資本家は、すでにのべたように、婦人労働力の價值が平均的に低いのとあいまつて、とりわけ多くの剩餘價值を搾取するのであり、このことは、婦人が男子と同じような労働をおこないながら、その労働の價格が男子より低いという形態をとつてあらわれる。そこで婦人労働者の不満がよびおこされ、「同一労働同一賃金」の要求がうちだされるのである。

もつとも婦人がまだ、夫の「成功」によつて、あるいは結婚によつて、家庭に落着こうという幻想をいだいているうちは、「同一労働同一賃金」の要求がうちだされるのである。

「同一賃金」の要求はそれほど發展せず、男女間の賃金差を婦人労働者が自らみとめてさへいる。しかし資本主義はこの幻想を容赦なくうちくだいていく。労働者家族は妻や娘が働かなければますます生計を維持しえなくなり、「同一労働同一賃金」の要求は、「婦人に職業の門戸を開放せよ」という要求とともに、貧困化する労働者階級の運命と密接に結びついたものとなつてくる。しかもこの「婦人に職業の門戸を開放せよ」という要求は、婦人の賃金を引下げる婦人失業者の壓力をやわらげるものとして、「同一労働同一賃金」の要求と意識的に結びつけられるのである。この點で、一九五四年七月の第二回國際金屬機械労働者會議において、G・アドウィッチが「同一労働同一賃金」の原則とともに、「働く權利、あらゆる職種の婦人への開放、婦人労働者としての資格の承認」を基本要求としてかかげたことは、注目されねばならない。(最後の部分は統計や資料にもとづいて具體的にのべるつもりであつたが紙数の關係で抽象的敘述におわつた。したがつて結論的部分は、日本獨自の問題とともに別の機會に發表する。)

〔未完〕

(註一) 舟橋尚道「労働の價格とその法則」(經濟評論、昭和二年八月號所載)

(註二) ア・コンタイ「新婦人論」九九頁。

(註三) 「第二回國際金屬機械労働者會議議事録」五月書房版一三六頁。

## 西ドイツ中世における“Bauerntum”の形成

——Codex Laureshamensis を中心として——

宇 尾 野 久

「寄進帳はカロリング時代の經濟史の最も重要な資料に屬する」<sup>(1)</sup>とA. Dopchは述べている。確かに寄進帳は賃子帳の内容を説明するものとして當面C. L. にあらわれてくる直接農耕者のStandの社會經濟的條件を究明するために不可欠のものと言わねばならない。

然し乍らその限界を見きわめずに絶對的な價值を認めようとすることは既に過去のものとなつてゐる。<sup>(2)</sup>

この間の事情に就いてOtto Brunnerは次のように述べている。『領主制の古い歴史に對する主要資料である寄進帳と賃子帳は唯々ヘルンシャフトの所有を描寫するのみで、全體の否より小さな地方でさえも土地所有配分を描寫していない。加うるに夫等は初期及び高度中世においては殆んど聖界の文書から由來している。然も大部分多くの個別的寄進によつてその所有を増大し、加うるに敘任權爭以前には全く「ヘルンシャフト」ではなくて、就中その寄進者や

守護のヘルンシャフトに編入されていた聖界のグランドヘルンシャフトは、ここで當然誤つたビルドを呈示している。然し後期においても俗界グランドヘルンシャフトの賃子帳はある場所の土地所有配分を確定するのに充分でない。このことは或るBerhの收入記述としての賃子帳の性格によるものである。……故に(中世または十三世紀末までの少い資料に限定されずに)十八及び十九世紀のずっと後の豊富な資料から出發し、此處から古い時代にもどる作業をせねばならない』と。勿論A. Dopchも亦賃子帳の限界に就いては最も良く熟知せる編修者であり「その本質上當時(十一十三世紀)の賃子帳は均齊なまた完全なその映像を與えない。當時の賃子帳は賃子で貸出された土地のみを記そうと慾し、尙自己經營にある土地に就いては何ものも含まない」と述べている。

そのような制約にも不拘C. L. の中で直接農耕者のどの程度の生産條件が知られ、また之等の農耕者の社會政治的Standはどのようなものとしてあらわれて來るであらうか?

屢々引證されるカール大王の御料地令の自由民の本來の社會經濟

状態を示唆するものとして *Formulae Stirmondicae* (Turoneses) N. 43 (MG. FF. 1, 158) は左の如くに述べている。

他人の勢威に托身する者何某(私)より

御館様某宛

私が衣食の資に乏しき次第は貴殿の良く知り給う處なり、されば貴殿の御敬虔にすがり申し、貴殿の庇護に私を委ね若しくは托身する様私に於いて自由意思にて決定せり。斯くて又私が行うべきこと(左の如し)。即ち夫に對し私が貴殿に奉仕し、貢獻し得る生活の資並びに衣服を以つて貴殿は私を扶け、支持せねばならず、また私は生きてゐる限り、自由民の状態で貴殿に奉仕若しくは義務を果さねばならない。且つ私の生涯を通じて貴殿の勢威若しくは庇護から離れずに私の生涯を貴殿の勢威と保護のもとにとどまらねばならぬというぐあいにするべし。このために吾等の一方がこの契約を忌避せんとすればそれだけの金銭をその相手方の契約者に支拂い、また契約自體有効にとどまるよう同意す。斯くて同一内容でしたためられた二通の書狀を相互に作成し確認すべし、兩者また斯くの如くなすべきこと(以上の如し)。

右の書式は *Seniorat* (つまり *Herr* (Senior) と *homines* の關係を示すものであるが *F. Lütge* がカロリング以前のグルンドヘルシヤフトには *Das persönliche Moment* が強く前面にあらわれており、此處ではヘルシヤフトは土地所有ではなしに人間に基づいてゐる、つまり *Munt* (人間に對する *Gewalt und Schutz*) がその本質的要素であると述べている如く、後期の *reale* (*echte*)

*Grundherrschaft* よりはより純粹な人間關係をあらわしている。然しカロリング期における之等の自由民はよりレアルな社會經濟關係の中であらわれてくる。

C. L. に屢々見受けられる *accoli* (*accolae*) は、このような屬人的な部族法典の意味での自由民として現われる譯であるがしかしすでに上述の如く自由の意味構造の轉換により、よりレアルな社會政治關係、つまり *Munt* のより現實的な社會經濟關係の具體的な擔い手となる。しかしその際自由民自身の發意 (*voluntas*) とロルシュ聖堂のレアルなムントの展開の統一がその實現の契機となつてゐる。

*Glossar de Ducange* によれば *Accolae* はその出典の時代と場所により著しい變化を示している。サリカ法典 (*K. A. Ekkhardt* 編修) の LXXX. *De migrantibus* にみられる村内移住者の如き意味で *létakos*, *répokos*, *érokos*, *teoprot* といった性格がみられるであろうが然し *Ducange* の引證している引用例の中で C. L. の *accolae* の説明に最も適切と見做されるのは “*accola, qui alienam terram colit. Accola, qui in eodem loco manet.*” である。高地ドイツ語の語彙集も亦 *accolae* に就いて “*qui alienam terram colit—lantsidleo der framada erda niuzit*” (他人の土地を利用するランツの居住者) と言うように語つてゐる。

R. Köschke は之等の *accoli* が部族法的な意味での、つまり部族共同體的な意味での自由民であり更に “*landlose Freie*” であつたと述べてゐる。<sup>(9)</sup> *F. Lütge* は若しこの見解が正しければその

テーゼであるカロリングの社會經濟構造の轉換と共に(部族法的な意味での)自由と非自由の内容の推轉が起り、*accolae* の人格的な自由の侵害なしに主人の *Grundholden* となることの例證として擧げてゐる。このようにカロリングの土地なしの自由民は社會經濟的な *Stand* の保持者であると同時に *Muntherrschaft* のもとに入る關係上政治的な支配關係としての *Stand* の保持者に轉化する。C. L. の寄進帳にあらわれる *accolae* は左の如くその数が僅少であるがしかし必しも同一の社會經濟狀態のものとしては現われてゐない。

Urk. Nr.

5. “*nec ad homines suos, tam ad ingenuos quam et ad servientes, seu accolatus ipsius monasterii distringendum.*” (772. Mai.)
6. “*accolabus, mancipiis.*” (773. Jan. 20.)
7. “*accolabus, mancipiis.*” (774. Sept. 2.)
12. “*farinarius, mancipiis, accolabus.*” (786. Febr. 25.)
13. “*farinarius……mancipiis, accolis.*” (788. Juni 7.)
14. “*accolis, mancipiis LXIII.*” (790. März 1.)
178. “*edificiis, acolabus, terra culta.*” (782. Jan. 21.)
210. “*acolabus, mancipiis.*” (768-778.)
268. “*acolabus, mancipiis XII.*” (782. Juni 3.)
502. “*acolis, mancipiis.*” (782. März 6.)
505. “*acolis, mancipiis.*” (788. Juli 11.)
552. “*acolabus, mancipiis.*” (767. Sept. 13.)

西フランク王国の “*Bauerntum*” の形成

1097. “*aculabus.*” (782. Febr. 27.)

右の文書に現われた *accolae* の大部分は非自由民の上位に置かれている。従つて之等の人々が一應部族法上の自由民であつたと推定しても大きな誤差は起らない様に見える。更に彼等が “*landlose Freie*” であることも他の動産や不動産と共に寄進の對象になることによつて確認される。この點で *Ducange* は “*accolae, coloni seu ascriptici, qui simul cum praediis venibant.*” (土地財産と同時に來たれる近住(小作)人、小作人若しくは土地附屬人)とも述べてゐる。然し乍ら上述の文書のすべてが *accolae* が他の非自由民より上位にあることを示してゐる譯ではない。殊に C. L. *Urkunde Nummer 5.* のそれは明かに *ingenuos* と相對置されるものとして “*servientes(Unfreien) seu accolatus*” と述べてゐる。従つて部族法における自由、非自由の外に更に *Seniorat* 内部におけるよりレアルな社會經濟關係が問題となつてゐる譯である。つまり *ingenuos* はその職能の限定されぬ王の *Munt* に服するロルシュ聖堂の *homines* であり、*servientes* sive *accolae* はその職能の限定されたものとしてあらわれてくる。従つてそのような社會經濟的な機能轉換と社會政治的な意味轉換によつて初めて他の寄進文書における *accolae* の序列の意味が理解され得る。つまり寄進者の側からすれば *mancipia* の如く解放の際の解放金の要求權もなくその機能の點で非自由民と等しい *accolae* は時には非自由民より劣弱な價值しか認められず、むしろ譜代の非自由民 (*Erbenfreien*)<sup>(9)</sup> あるいは *Familia* の新來者として輕視される場合も起り得たのであらう。

殊に之等の *accolae* が *huba serviles* (die Diensthufe) に住み、*Urban* に記載される (*adscriptio*) 場合にはたとえ遠隔地を小作するといふまでも *mancipia* 以上のものであるとの社會經濟的評價は必しも期待しがたく、主人の庇護なしには困難な状態にあり、後期の都市の發展期に都市に逃むる *colonus* に對する如く特に *Schollenpflichtigkeit*, または領主の *Familia* 外への *Eigen* の移轉禁止等の規定を *Lex familia* 又は *Ius agriculturalium* (*Freistift*) と稱したものの規定したものとその懸念はなかつたのである。

(註) 但 C. L. Urk. Nr. 5 の原資料の問題の箇所は “*nec adhomines suos ta’ ad ingenuos qua’ rad servientes seu accolatas ipsi’ monasterii distringendu’*.” となつて居る。K. Glöckner は上述の如く正確に之を修復してゐる。

だが勿論すべての自由民がこのような状態であつた譯ではない。

M. G. Legum, sectio II. 48. Memoratorium de exercitu in Gallia (Occidentali praeparando) (S.134) によれば

- 一 *beneficium* を有する者。
- 二 *mansos* *quinque* de *proprietate* を有する者。
- 三 *quatuor* *mansos* を有する者。
- 四 *tres* *mansos* を有する者。
- 五 *duas* *mansos* を有する者。
- 六 *unus* *mansos* を有する者。
- 七 *dimidium* *mansos* を持つ者。
- 八 *mancipia* の *Proprian* *possessionem* *terrarum* を持つ

#### たぬ貧窮者。

というように自由民の經濟能力を克明に規定している。之等の自由民のうち *Beneficium* を享受する者はその *honos* の受與者の *Munt* に服してゐたことが推定される。然し 5-3 *mansos* の所持者は必しも *Seniorat* の關係に入らず、カールの時代の軍制上の中堅的な自由民を代表してゐたのである。尤も之等の *allodia* に基礎を置く自由民がメロヴィンクの *omnes leudes* と同様に國家的なカールの *Vasallität* の關係に入つたことを否定するものではない。従つて *Capitulare Missorum de exercitu promovendo*, (anno 808 (M. G. ibid. S. 137.)) は之等の四ノーン所持者といふ單獨に出陣する *allodia* の所持者と *Senior* 又はその *Comites* に従つて出陣する *Beneficium* 所持者との區別をしてゐる。メロヴィンクに於ける *leudes* が同時に二人の君主の *leuds* たり得ぬ如く今やカールの *vassal* であることと更に他の *senior* の *homines* たることは相對的に區別されてゐる。然しメロヴィンクにおける廣義の *omnes leudes* (*homo francus*) たる限りに於いてはそれの自由民も出陣の義務を負つた *Munt* に服す。その際 Joseph Calmette は之等の四ノーンの *allodia* を所持する自由民を重視し、之を *Vollhufe* の所持には力點を置いてゐる。之を Otto Brunner は斯く *Die Vollfreien im ursprünglichen Sinne* を *Tirol, Steiermark, Kärnten* 等の後期の植民地帯における ein “*freies*” *Bauerntum* といふ *Freien* から劃然と區別してゐる。然し J. Calmette はまた四ノーンよりも少い農地を所持する自由民の數は多いと述べており、少數

の非自由民と後期の下級 *Ritter* の如く數人の家族員をもつて主人自からフーネの經營を営んだのであらう。之等の自由民の最下限については前記の貧窮自由民と自己寄進の自由民が考慮される。

C. L. における自己寄進 (*autotraditio*) の例は Urk. Nr. 715, 839, 1110, 2867, 119. の少數であるが之等の大部分がそのような自由民の状態を示してゐる。

Urk. Nr. 715 (anno. 790) は *Presbiter* (pbr.) *Erlebaldus* の自己寄進であるが 1 *mansus*, 1 *locus* (*vinea*), VI *mancipia* 等の寄進を含む。

Urk. Nr. 839 (anno 793, Mai 5) は *Adalmut et Coniux eius Bertgart* の自己寄進が 1 *mansus*, XV *iurnales* の寄進と *mancipia* の記述なく、恐らく家族のものとを總括。

Urk. Nr. 1110 (anno 784-804) は *Erpmann* の自己寄進が *Omnes collaboratum* (*erarbeiteter Besitz durch Rodung*) と共に寄進。

Urk. Nr. 2867 (anno 787, Juni 12) は *Wolbertus et coniux eius Vodalhilt* の自己寄進が 1 *manus*, XV *iurnales* と共に寄進 (Urk. Nr. 839 と同一條件)。

Urk. Nr. 119 (anno 1084-1088) は *Heinricus* という名の自由民がレプラを患えるための自己寄進が *mancipia* を有するも年代も新しく、當面の用例に不適當。

之等の自己寄進の行われる動機は自由民の經濟的窮迫というよりはむしろ信仰によるもの又は將來の保障を得るためと考えられる。然し前述の貧窮者 (*pauperes*) によりメンキピアも持たぬ土地

西ドイツ中世における “*Bauerntum*” の形成

なしの自由民については恐らく *accolae* と同様な條件が考慮されねばならないであらう。

最後に之等の人々の生活圏については貸子帳、寄進帳からは僅かしか知り得ないので他の資料に準據して考慮せねばなるまい。

C. L. の *Chronik* に現われる *uilla*, *marca* (若くは *Weiler*) 等の寄進は殆んど王又は貴族 (M. Weber に依れば *Grundherr*) のものである。カール大王の御料地令における如く *莊司* (*Judex* C. V. 3) 又は仕人 (*ministeriales* C. V. 10) により管理され、諸種の非自由民によつて奉仕される (C. L. Urk. Nr. 1) 莊の構造をめぐり、納屋 (*scura* C. V. 19) 蔵 (C. L. Urk. Nr. 3813, 3821. *armarium*)、酒藏 (*Cellarium* C. L. Urk. Nr. 763) 酒藏番 (C. L. Urk. Nr. 161, 3682, 3818, 3886. *Cellarius*)、附屬農園 (*mansionilis* C. V. 19) 領主の蔵や作業場 (C. L. Urk. Nr. 3677) 女子作業場 (*genitia* C. V. 31, 49) 粉碾場 (*Molendinum*. C. L. Urk. Nr. 40, 48-50) 等が設けられ、粉碾入 (*farinarium* C. L. Urk. Nr. 1) 又はその他の職人 (C. V. 45) が居住し、莊司によつて裁判集會 (*audientia* C. V. 56) が開かれ、又莊舍 (*Casa*) が莊司によつて哨戒 (C. V.) されてゐたのである。唯、*locus* の住民は此處から離れて住む。

然し *Gau* 別の寄進帳では 1-4 *mansos* [C. L. Urk. Nr. 1215 (anno 777), 498 (anno 777)……] と言つたより小規模な寄進が現われてくる。之等は寄進した *mansus* 以外の *mansus* が尙寄進者に存在することを考えると前掲の軍制上の中堅的な自由民の 4 *mansus* 所持者) 以上の *mansus* の所有者が可成存在したことを

意味すると同時に之等の寄進された mansus が praecaria (praestaria) で寄進者に留保されていたことも考慮せねばならぬ。

更にまた Gau 別寄進帳には  $1/2$  mansus (Urk. Nr. 1035, anno 770),  $2/3$  (Urk. Nr. 1241, anno 777),  $1/3$  (Urk. Nr. 2515, anno 783),  $1/4$  (Urk. Nr. 1109, anno 790?),  $1/6$  (Urk. Nr. 1453, anno 768) の寄進の形態も現われている。又等分 mansus に就いては上述の如く mansus の本来の意義からしてその收穫又は利益の  $2/3-1/6$  が寄進されたと受取れば統一的經濟單位(後に實子單位<sup>(23)</sup>)としての mansus を分割してその經濟的價值を破壊するといふ不合理が取除かれるだろう。若し然らぬれば  $1/3$  (tertiam partem de uno) molino: molendinum (Mühle) (Urk. Nr. 516, anno 766) といふ場合と  $1/6$  の場合とを三つと分離するといふ不條理をも犯さねばならなくなるからである。mansus はその附屬物(森林、草地、建物、耕地、葡萄酒、通路、用水、用水權、製粉場、ベンキビン等々)と共に寄進され、之等の Komplex として現われているがカロリング期には必しも自由民の  $1/6$  當りの經濟單位として現われてはこな<sup>(24)</sup>。但この外に sortes (sors) (Urk. Nr. 441, 537) 及び iurnallem (例へば Urk. Nr. 2437, "unum mansum, et XXX iurnales, et pratum 1." anno 782.) の寄進が Gau 別寄進帳に現われるが、多くの零細な iurnales の寄進と並んで寄進される 100 iurnales de terra aratoria (Urk. Nr. 3057=3704 a anno 782.) の如き廣大な iurnales の寄進は必し  $1$  mansus = 30 iurnales と書いた概念を拘束すれば C. L. Nr. 2437 の如く同一文書の中で全く兩者

mansus と iurnales) は別個のものとして現われている。從つて  $2/3-1/6$  mansus はやはり統一的經濟單位としての mansus を前提として考へておくべきであり、最初から之を單なる地積の集合として XXX iurnales の  $1/2, 1/3$  と言ふように扱ふべきであらう。C. L. の Gau 別寄進帳に現われる多數の零細自由民はこの  $1$  mansus, iurnales の經濟的な基礎で生活していたように思われる(但 iurnales の地積と土壤の輕重、地形、用途によつて多少一様たり得なかつたに就つては Waitz が既に "Über die altdeutsche Hufe" で指摘してゐる)。

[Dreifelderwirtschaft; de terra araturia XXVIII iurnales in tribus locis situs (C. L. Urk. Nr. 662, anno 771 Juni 2.) といふ文書に Hansen が之を引證してゐる]

## II

C. L. における直接農耕者としての半自由民 lidus (litus Urk. Nr. 1. Z. 20) [K 及び hubae lidorum (plena, integra) = Vollhufe der Liten: Urk. Nr. 3673, 3680.] と Conlibertus (Urk. Nr. 1. Z. 20), colonus (Urk. Nr. 85, 151, 153, 157, 164. Z. 40), censuales (Urk. Nr. 3817) と共に現われている。

然し初期カロリングの lidus, colonus が被征服部族又は部族法の意味での自由民から轉化した Halbfreie であり Conlibertus が "affranchi ou affranchi collectivement" といふたすべし Stand の社會經濟的機能轉換若しくはその社會政治的意味轉換の問題とする際には相對的に區別して考察せねばならぬであらう。

この意味で C. L. Urk. Nr. 40, K. 66 の "sclavi" (Russische Kolonien) も亦 Colonus のやうに編入される。

然し Censuales は大部分半自由民から第一次の解放によつて半自由民となつたものであるが C. L. の唯一の該當資料として現われる Urk. Nr. 3817 (anno. um 12 Jh.-1200) の censuales は中世固有の半自由民たることを示してゐる。

A. Dopsch 及びその線に沿つて Otto Brunner は Fontes rerum Austriacarum, Österreich. Urbar. u. a. に著して行つた斯かる半自由民の Stand の推轉といふの Formulierung に依れば

「カロリングに於ける Grundherren = ingenui (Adel) と Unfreien の區別 (A. Dopsch, Entwicklung.) (F. Lütge, Sozialwirtschaftliche Strukturverwandlung).

「十一世紀末に始まる完全半自由民の第一次解放——lex et ius Censuali (Censualenrecht) の形成 (十一十三世紀に於ける Kolonisation を媒介する)」「十一世紀における社會的展開に關して familia の構造變化が起る (1) familia militaris (a) familia ministerialis (Meier 及び) (b) familia militaris. (2) familia censualis. (3) familia servitis 形成の如く。かへて十一世紀に familia libra (nobles), familia servilis の ord. 形成の如く (Herrschaft und Bauer.)

「十一世紀における半自由民の第二次解放——ministeriales, milites の出現。lex familia [Hofrecht, des Hochstiftes Worms (1023—25) oder von Limburg (1035)] 現はる。

西ドイツ中世における "Bauerntum" の形成

四「十二世紀における新たな nobles の形成。Gerichts-ode Bannbezirk の擴大。(ebenda S. 220—1) ("Luft Macht Eigen.") Lehn, Immunität の強化と解體の萌芽發生。

五「十一—十三世紀に於ける都市の發展と關連して Frohndienst, Naturalleistung の Geldleistung への展開——それによつて賦役の unfreier Tagelöhner による置換起る。(經濟轉換による Ritter の Gutswirtschaft 及び) (A. Dopsch, ebenda S. 172.) [かへて半自由の區別をなすべき變轉の結果現實の Standideal の發展起る。(O. Brunner, ebenda S. 452, 462.)]

六「十四世紀にラテン概念の potestas の如く土地に關する Leib-, Gerichts-, Vogteiherrschaft 等々を以て之を總括するが如く  $1/2$  の "Herrschaft" 及び (A. Dopsch, ebenda S. 13—14.)

その法的條件としての王權の "lehnrechtliche Herrschaft" 及び他の "reichsmittelbare Gebiete" への後退及び "Der Strukturwandel der sozialen und wirtschaftlichen Kultur" である。[但斯かる "Herrschaft" の概念は之の本質として國有の法的基礎の上に置かれたる。(O. Brunner, ebenda S. 281)]

七「十五世紀に Landesherr であるが之を以て Landesherr とする Landesherrschaft の機構及び展開。(O. Brunner, ebenda S. 278, 288.)

八「諸 Herren und Ritter als der "Adel" 及び engere Landesgemeinde 及び Landleute を總括して Landesherr

の機能轉換によるLandeshoheit形成される。(O. Brunner, *ibid.*, S. 451, 412.) かく Landesherr は Landtag als "Landstände" を召集する。(a. a. O. S. 496.) この過程は Landleute はラントの等族として新たに社會政治的な同時に社會經濟的な意義と機能を獲得する。いわゆる Ständestaat がこのような過程で成立する。) この史的運動は十三世紀のザクセン・シュビーゲル(ラント・ヒート)に散見されるような bäre (Bauer) 狹義のメンデヘルンシャフトから分離し、政治的にあらたな意味を獲得する。

(註) 尤も hochfreie Geschlechter の大部分の消滅 (a. a. O. S. 467) 植民の特殊事情(例へば Pflegericht, Allmend "regal" の賦與等の有利な條件と相俟つて Tirol 等では急速に genossenschaftliche Autonomie を ständisches Leben への参加を達成する。(a. a. O. S. 435.) [Tirol は適に Österreich での Bauernstand の政治的權利の達成は遅れる。(a. a. O. S. 452.) 従つて F. Lütge 東南ヨーロッパ——バルカン——西南及中部ヨーロッパのメンデヘルンシャフトの比較に當つて Tirol を除外する。(F. Lütge, Die bayerische Grundherrschaft, S. 184.)]

「だがその際 Hofgenossenschaft は Dorfgemeinde の形成に高い意義を獲得した」と (A. Dopsch, Herrschaft und Bauer S. 223.) へ Grundholden への政治社會的地位の獲得の運動を無視し得ない。(H. Mitteis, Deutsche Rechtsgeschichte, Kap. 35. (4).]

へ十六世紀に於ける Territorialstaat への展開。(O. Brun-

ner, a. a. O. S. 189, 255. F. Lütge, D. S. u. W. G. S. 149—50.)

そのような現實的可能性の全連鎖における史的運動の中の C. L. の Censuales はその稀少性や地域的特殊性を越えた史的な重要性を有する。このようなものとして考へる時 Censuales の名稱に立止ることなく C. L. になはるその本質的事態を求めねばならぬ。そして C. L. Urk. Nr. 154, Census ad confectionem cerei (um 1145) ([註] 穀物の消費のたるに「年々」貢子 [を納める。]) といふ文書の背後に A. Dopsch の Cercensuales を求めるべきに強くなる。だが Cera, Cereus の貢子としてたゞ Wornsgau の進進文書に "duo mancipia Libgerum et Starcherum ut quisque denariatas II Cerei in festo S. Remigii persolvat" (Vor 800 ?) (註) ヴィギヤムの祭日に各々穀物に二デナリウス納めるというメンタルとメンタルの二人の非自由民を [進進する。] (C. L. Urk. Nr. 1427.) 又は "duas anchillas Wagarhit et Altburg, ut in festo S. Michaelis (Sept. 29.) solvant in Censum IIII denariatas Cerei." (765—880) (Urk. Nr. 1592.) といふ貢子の貢子貢子形態(殊に Geldleistung 以外に置換えられぬような Ackerfrucht) の轉換を有つて即座に Stand の變化を推定し得ない。然るに A. Dopsch は "pro utilitate ecclesie" (Köln 1221), "spe melioris rei" (Westfalen, C. 1224) といふた一般的表現を即座に聖堂の所領經營の合理性と結びつたと同じ行を過ぎが起るであらう。殊に C. L. の非自由民は後に述べる如く Persönliche Leistung を納める者

へ manus vel hoba serviles 貢子貢納義務者とは著しくその給付能力を異にし、その Errungenschaft の状態を異にするので Stand 上昇の可能性の距離は著しく Urbar の貢子形態の變化のみで判斷することは即断となる。

C. L. の Hubenlisten, Urbar に現はる貢子形態は Teilbaue (C. L. Urk. Nr. 3639 [anno 769—903]) 及び Gegenleistungen (proendu frugali=praevendo frux) (C. L. Urk. Nr. 3682. [um 1000]) にほゞまで極めて多様であるが初期 (8—9 Jh.) の Hubenlisten に何のハブリス(tributarius) (tributarius=3 denare) (又はソリダス)の價の關羊(又は粗毛織物 (friskine (ge) 何反(鐵等)を納めると述べてあるので之等が代金納貢子となる際に之等の物納貢子「何々の代りに何ソリダス納める」と言つた文言を特に記入する必要がある)たのであらう。

自由フーフに就いては、他の貢子と共に「引受ける限り奉仕する自由フーフ」("huba ingenualis quei soluit in censum .....et servit sicut ei precipiunt") (Lorscher Reichsurbar Urk. Nr. 3671, 3674.) といふ具合に「土地の慣行に従つて」("ut loci consuetudo est") (Urk. Nr. 3661, 3661a.) またその給付能力に従つて奉仕し、無收穫のものには金錢又は代物が支拂われる。

C. L. Späte Güterlisten (um 11. Jh.), Zinsregister (um 1200) にみられる貢子は確かに壓倒的に Geldzins の形をとるが上述の事情を考慮して「義的に之を "Stand" に直結せず Urbar を媒介として Stand の實態を探る可能性の極限を確認せねばな

西ドイツ中世における "Bauerntum" の形成

らない。(然し C. L. の文書には確かに Stand の記述を經濟的隸屬の度合に等置しようとする傾向がある。)

そのような事態のもとで社會經濟關係、つまり貢納の觀點から Censuales の實態を探究する時 C. L. では Censuales の他の表現 Colonus (tributarius), privati homines (homines monasterii) 等を見出す。

C. L. の Colonus は 989 Okt. 19. (Urk. Nr. 85), 1148 März 29 (Urk. Nr. 151), 1165 Aug. 14—31 (Urk. Nr. 157), 1179 April 15 (Urk. Nr. 164240) の時期にあらわれ、この十世紀以降の Colonus は完全な非自由民より優れた權利をもち、この點で部族法典にみえる servus から解放された(しかし完全な自由民ではない) tributarius と共通の經濟的機能を果たすと同時にまた部族社會におけると異つた史的意義をもつ。つまり十世紀以降の自由民が信仰から聖堂の Censuales (Colonus, tributarius) として自己寄進したり軍事的奉仕を果たす新たな條件が中世に生ずるのや Colonus の主要な經濟機能としての貢子給付と同時に政治、軍事、宗教、法律的な面をもその Stand の條件として考慮せねばならぬであらう。

C. L. (Urk. Nr. 3667) といふたれた Privati homines 又は Privati viri (Urk. Nr. 3668, 3669) は本来土地に對してではなく人的に貢子を負担し、"Curiales" にいつての賦役、貢子も納める。つまり之等の人々は Colonus とは逆に貢子負擔能力においては劣っているがしかし聖堂のより強い Munt に服したのであらう。

吾々の問題とした西ドイツの領主制について F. Lütge は“un-gesessene Laten” (Censuales, Hofleute usw. benannt.) が他に移住する「點を指摘」し C.L. の Censuales の稀少性の根據を明らかにしている。そして“die gesessenen Laten” の土地負擔 (Realasten) が十三世紀の價格發展からとり残されたので十四世紀の轉換期に之等の“Hofleute” は新たに (reale) Leibeigene となることの展望を與えている。

中世における直接農耕者の Geburtsstand, Berufsstand が同時に Politische Stande として現われると言ったことから中世における生産諸關係は現代經濟理論における純粹に考察された生産關係とは異つた面をも生ずる。従つて F. Lütge が Grundwirtschaft (Gutswirtschaft)-Grund-oder Gutsherrschaft-Herrschaft (Munt) の相對的區別を行つてゐるのやうなところへ。そして領主の直接農耕者 (當面 Censuales, colonus, privati homines) と對する Munt (Gewalt und Schutz) のやうな生産が營まれる。

最後に狹義の非自由民が問題となろう。半自由民つまり廣義の部族法の自由民に相對する意味での非自由民が極めて多様な意味をもつていた様に完全な非自由民 praebendarii (C.L. Urk. Nr. 53, K143b, 143/9, K153, 153, 3825), servus, ancilla, mancipia servilia も亦複雑な意味と行動圏をもつてゐる。之等の全然 Manumissio を受けず liberti の状態にも達していない非自由民の意味構造についてはすでに別に發表の機會を持つことができた。ただその際 F. Lütge は M. Weber の“Herreneigentum an

Menschen” (Leitherrschaft) はカロリング時代に初めて變革をむく echte (reale) Grundherrschaft に轉化したことまたその際いづれの場合にもローマ法の dominium 又は現代の獨法に於ける Eigentum と異つた Herrschaft (Muntherrschaft) を基礎とし社會經濟史にとっては副次的な社會政治的な Machtposition が作用してゐたことを指摘してゐる。その場合成立時期に問題があるとして A. Dopsch-O. Brunner 及び F. Lütge がドイツの Herrschaft の概念の獨白性を主張し、本質的にローマの dominium の概念から區別してゐる點が注目される。

従つて Fritz trautz が C.L. 40 (anno 877) を引證して之等の完全な非自由民の撲殺 (Niederschlag) を部族法に依據して語る場合その限りにおつては正しうが之等の者が聖堂の Grundholden (oder reale Leibeigene) に編成されてゆく意義をも確認せねばなるまい。その上 C.L. の唯一の文書としてあらわれてくる C.L. Urk. Nr. 763 (anno 762, März 3) “Il Mancipia Wiligerum et Blittrudem quei tradidi ad faciendos ingenuos” を Stand との關連で考慮する必要がある。

七六四年に始まるロルシュ聖堂の創建文書より一二七九年五月卅日の交換文書に至る C.L. の記録を通じてその社會經濟的内容を考へる時「十二世紀における土地所有の經濟組織の根本的變化については嚴格には述べられ得ない。事實經營に何等の變化も起らなかった。……十二及び十三世紀の經濟發展は、自由な様式の新しい土地利用形態を立證せず、それは屢々カロリング時代すでに豫め形成さ

れたものの直線的な繼續にすぎない。」と述べた A. Dopsch の見解は C.L. に就いても亦重大な意義をもつ。確かに C.L. においても十二—十三世紀に於ける非自由民の Stand の社會經濟的推轉は著しいものがある。だが然し之はいまだ上述の中世的支配關係そのものの上に立つており新たな社會經濟的志向の變化がみられない。そして十四—十五世紀の Landesherrschaft による農民の (ラント内) Grundherrschaft からの解放 (Herrschaft の轉換)、都市並びに農村における社會經濟構造の變革をもつてしてもいまだ Landesherr の Herrschaft に基づく支配關係の外にあり得なかつた。

社會經濟史研究にとって副次的なものとなるが Otto Brunner は一八四八年迄——社會經濟的に自由な又は非自由な農民が Landesherrschaft のやうな (Pächter としての) [經濟] 關係以外の Unterthan, Holde としての (政治) 關係に立ち——本質的な變化は起らなかつたとしてゐる。

然し吾々の問題とした Bauerntum の成立過程における十二—十三世紀の之等直接農耕者の Stand の意味轉換の理解は十四—十五世紀の社會經濟變革の直接的前提としても不可欠の條件と思われる。

一九五五年五月廿九日

(C.L. 研究のために援助を頂いた塾の學事振興資金による研究の一部であることをこの際明記しておく。)

註

(1) A. Dopsch, Die Wirtschaftsentwicklung der Karolingerzeit. Bnd. I. S. 134.

西ドイツ中世における“Bauerntum”の形成

(2) 古典的なウィリカチオン・システムの經濟的基礎に支えられた舊領主制理論とマルク制度に基盤を置く農民理論の檢討の進むにつれて資料自體の檢討が行われ、之等の資料を積極的 (positive) に讀むことによつて兩者の統一的ビルドとしての Herrschaft und Bauer の全面的理解が達成された。然しその際資料の極限において幾つかの制約が現われてくる。之等の制約は時代的、地域的なものとしてあらわれ、更に文書自體の性格つまりそれらの大部分が聖界の資料であることも可成の制約となる。しかし乍ら寄進文書の内容は王領、世俗領の寄進に關するものを含むので文書自體が聖界のものであることはさして大なる制約とはなり得ない。

(3) Otto Brunner, Land und Herrschaft. S. 286.

唯、此處で政治史又は法制史の據點となるヘルンシャフトの本質が不變であるとしても十八—十九世紀の資料が果して社會經濟構造の異なるそれ以前の時代の本質的事態の解明の正確な基盤たり得るかの問題が檢證されねばならぬだろう。

(4) A. Dopsch, Herrschaft und Bauer. S. 282.

C.L. の Urban に就いてもこのことは全面的に妥當する。然し乍ら Saland の Ackerfron が頻繁に現われる限りにおいて領主の自己經營の記述を全然缺くとは言い得ない。唯、之等の奉仕が非自由民、半自由民の生産手段でなく領主の生産手段によつて行われ、後期における Grundholden の如く之等の生産手段がいまだその Ertrungenschaft となつて居らないように推定されるが明示されては居ない。(Capitulare de

villis, 23, 32.)

従 C.L. Urk. Nr. 3671." servit....cum nauti et aliis instrumentis." (um 9. Jh.) C. L. Urk. Nr. 3677.

"solunt....Vili Pannos ex dominico lino, et XI pannos ex proprio lino" (um 9. Jh.) 上記の二つの表現は、そのころの西欧文書中の布の貢納の様子と領主の田荘とを織り交ぜる。

(10) Vgl. Klaus Verheir, Studien zu den Quellen zum Reichsgut der Karolingerzeit. (Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters. Heft 2. 1954.)

(11) C. V. 4 (francus) 50 (iber).

(12) E. Steinmeyer U. E. Sievers, Die althochdeutschen Glossen I (1859), S. 40. Vgl. Waitz, V. G. IV. 2, S. 345.

(13) R. Kotschke, Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters. S. 195.

龍溪集の領地を支配する自由民としての Accolae は、Stammesland の居住者であったことを示す giburo, buwazere (der Wohnende, Nachbar) と同一の意味から轉じたものと考えられる。(O. Brunner, Land und Herrschaft. S. 297.)

(14) F. Lütge, Die Agrarverfassung des frühen Mittelalters. S. 106. ff—S. 164.

(15) Fustel de Courange, L'Allen et le Domaine rurale pendant l'époque mérovingienne, Chapit. XI. 5.

(16) A. Dopsch, Herrschaft und Bauer. S. 162, 163, 164.

の農地經營の原理は、ゲルマン人の領土の所領の Streuung という特殊事情に媒介されて展開されたものであるが同様な田荘制度を小作に出すという事態は、むしろ Columella, De re rustica. Liber I. VII 4—5. などを参照せよ。

(17) A. Dopsch, ebenda S. 50—52, 223.

(18) 然しその等の自由民は、また中世後期における Ritter の如く、社會政治的にもまた社會經濟的にも共同の利益を主張する Stand として組織としてあらわれ、部族法的な Stand の意識から脱する。(Vgl. A. Dopsch, Die wirtschaftliche Entwicklung. S. 1 ff. Band II, 2 Auf.)

(19) Migne, Patrologia latina Tomus LXXI. p. 499—500.

"pactiones inter domnum Guntchramnum et domnum Sigbertum."

(20) J. Calmette, Charlemagne. p. 194—5.

この四所は Calmette は自費で軍事裝備を行つたフランク人所持者を指導するフランク人武士の者より多数フランク人所持者を分けるが、manse (mas) が本来一家の人々を養う經濟單位であったことを示すの推察を考慮しよう。しかしその等の變化が決して軍制上の變遷であるのではなく、社會經濟構造の變化から起つたもの。F. Lütge のレーヤや A. Dopsch は承認しよう。(A. Dopsch, ebenda. S. 24.)

(21) Otto Brunner, ebenda, S. 386—S. 435.

(22) M. Weber はその等の田荘の Autotradition は、その

を著作の各章に起るもの (Gesammelte Aufsätze, S. 553.) を示す。

(23) Vgl. F. Lütge, Die Agrarverfassung, S. 97—102.

(24) C. L. Urk. Nr. 1. Willswinda, Canor rhenensis pagi comes による Villa (Hagenheim) の寄贈。(Anno 764)

K. Glöckner は、その等々として Schenkung ganzer Villen として扱ひ、そのが同タイプの施主のマンサマンズ、マンコーン以外の人々の寄進文書が Urk. Nr. 1921 (anno 768), 1923—1932 (anno 766—808), 1999 (anno 778) 等に見出され、之等の人々の領地が同一タイプの入り組んでいることを、マンサマンズ、マンコーンの一團領地とみなしたことを示す。

C. L. Urk. Nr. 6. Largitio Magni Karoli in Heppenheim (anno 773—Chronik) の記載に K. Glöckner は、その Schenkung ganzer Villen と譯す。その Urk. Nr. 860—872 (anno 771—780?), 887—897 (anno 797—825) 等の人々の寄進文書に Das ganze Dorf といふ。K. Glöckner は Obbeheim と稱するところを、der kgl. Gutshof といふ。

但 K. Glöckner が全タイプの寄進の類に入れている C. L. Urk. Nr. 19, 25, 27, 53, 99, K. 120. Z. 55, 2658, 3522, 3707a 等は、皆施主の Urk. Nr. 3622 (in Eisen-zengoune villa Beruungen cum omni integrate, anno 793) のみが反證なきため一團領地として残す。Ganze Villen

の形成

als Lorsche Besitz といふ。

(25) C. L. Urk. Nr. 216 (804), 2658 (789).

(26) M. Weber, ebenda S. 553.

(27) Zumal in Karol. Zeit, Einzelsiedlung oder Neurodung abseits der Dorfanlage. [Z. B. C. L. Urk. Nr. 53 (loca et villulae illuc respicientes).]

(28) A. Dopsch, ebenda (Herrschaft und Bauer) S. 223. Die Zinseinheit des herrschaftlichen Landes.

(29) C. L. Urk. Nr. 418. unum mansum cum casa, et molino (anno 767), Urk. Nr. 2087. II mansos....cum hubis praeis siluis aquis et unam vineam (anno 804).

(30) 非自由民の Mansuarius (C. V. 39) はマンサマンズと譯す。hubarii の訳は、(Chron. Lauresh. S. 427. u. a. G. Waitz, D. R. G. Bd. V. 2. Aufl. S. 288.) (C. L. Urk. Nr. 3724b. u. a.)

(31) Zubehör der Horigenhufe.

(32) "I mansus, id est xxx iurnales." (C. L. Urk. Nr. 814. anno 791.) "Una hoba quod est xxx iugera terrae araturae." (Dronke, Codex, Nr. 66. anno 788.) "xxx iurnales, id est hubam." (C. L. Urk. Nr. 3609. anno 793.) "hobae regales=120 und 160 Morgen." "Normalgröße: 60 Morgen." (F. Lütge, Agrarverfassung. S. 266.)

但 F. Lütge は、その等の相違を後期の時代的な擴大として

(註) O. Brunner. 2. 2. O. S. 435.

- stung はたゞて金錢である。
- (33) A. Dopsch, Herrschaft und Bauer. S. 206.
- (40) C. L. Urk. Nr. 3651. u. a.
- (41) C. L. Urk. Nr. 3654. u. a.
- (42) C. L. Urk. Nr. 3657. u. a.
- (43) 例えは pagus Lobodunensis に於ける uilla Sickenheim のフーフエリストには領主フーフエと非自由民フーフエあり、之等は「トレンヌス」の價の關羊、十シトラのビーネ、鶏一羽、卵十五箇を支拂う。(C. L. Urk. Nr. 3651) (um 800) とあるが十一世紀末の同 Lobdengau の報告では同 Sigheim のフーフエーは五ソリドゥス納めるとなつてゐる(C. L. Urk. Nr. 3670)。しかし乍ら之等の賃子形態「賃子量の變化から生産力の變化を推定する」としたことは C. L. Urk. Nr. 22, 135, 157, 3664, 659, 315, 322, 647, 2590, 408, 414, 525, 617 bis 661. 等の Chronik, Traditionsbuch, Urbar と互に聖堂の權益、生産條件の検討(生産要具、播種量と收穫量の割合、投下勞働の集約度)更に貨幣價値の測定、C. L. に多く現われる自然的荒廢、土地利用形態の變化(例えは ministeriales からの農地の回收)、賃子以外の收穫物等々多くの問題が存在し、賃子帳における Naturalleistung から Geldzins への變形又はその賃子量の變化をもつて直ちに生産力又は生産性の變化を論ずることは、著しくその意味を減ずるのである。〔荷 C. L. Urk. Nr. 3836. (um 12. Jh.) にはチーズの代りに (pro caseis) ナデナリヤス(納める)と言つた表現が散見される。〕
- (44) C. L. Urk. Nr. 3671 (B. Forstzinsen an Getreide und Wein.) (葡萄無收穫のやうにナデナリヤス、穀物三回ナデナリヤスを支拂へ) Vgl. A. Dopsch, Herrschaft und Bauer. S. 209.
- (45) A. Dopsch はこの外に Censuales は decimalis (Kloster Formbach) と稱せられ、また Kopfizins を支拂はねばならぬ Censuales として、また Mancipia と稱せられるもの、更に Censuales の地位は Servitus と稱せられるものとを指摘してゐる。(但 Censuales の證據 Census (Zins) は tributarius 及び tributum とならざるべしと云ふ。A. Dopsch, Herrschaft und Bauer. S. 26.)
- Vgl. Georg Waitz, Deutsche Verfassungsgeschichte. V. 2. Aufl. S. 234—248, ff.
- (46) Lex Ribuaria, 62. De homine qui seruum tributarium facit.
- (47) A. Dopsch, Herrschaft und Bauer. S. 26. 32.
- (48) A. Dopsch, ebenda. S. 32.
- (49) C. L. Später Güterlisten (um 11 Jh.) Urk. Nr. 3667 (von unteren Neckar), 3668 (Sachsen, Leuthershausen) 3669, (Weinheim, Hemsbach).
- (50) Curta, kleiner als curtis (Bauernhof) (K. Glück, ner) Hofstellen (F. Trautz) (Deminutive von curta).
- (51) Fritz Trautz, Das untere Neckerland im frühen

Mittelalter. S. 110. (従つて Manus & Huft の貸子負擔者よりその負擔能力は劣る。)

(22) F. Lütge, Deutsche Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. S. 101.

K. Lamprecht, Skizzen zur Rheinischen Geschichte. S. 185—211.

(23) F. Lütge, ebenda. S. 16.

(24) A. Dopsch, Herrschaft und Bauer. S. 32.

(25) 「C. L. 以下は Mancipia」三田學會雜誌第四十七卷第四號。

(26) F. Lütge, Deutsche Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. S. 8, 19.

(27) F. Lütge, ebenda. S. 45.

(28) F. Lütge, ebenda. S. 45, 50.

(29) F. Trautz, ebenda S. 109.

「C. L. 以下は C. L. Urk. Nr. 40. Z. 8.」ut quandiu in hac mortalitate diuina iussione uixero」を指すのであろう。

(30) A. Dopsch, Herrschaft und Bauer. S. 25. F. Lütge, ebenda S. 99.

(31) A. Dopsch, ebenda S. 27, 28.

かくて第一次の解放を経た mancipia → censuales は第二次の解放によつて自由となる (ebenda S. 29.) が然し A. Dopsch はドイツ東南部でも西北部でも第一次の解放を経た mancipia のまゝ censuales の一部 (西ドイツの die gessessenen Lat-en) はたしかに Bauern であつたと述べている (ebenda S.

35.)

(32) A. Dopsch, ebenda S. 135. F. Lütge, Deutsche Sozial und Wirtschaftsgeschichte. S. IX (Vorwort).

(33) F. Lütge, ebenda S. 102. ナホノホノ時代は若し re-ale Leibeigene である。

(34) O. Brunner, ebenda S. 99.

(35) O. Brunner, ebenda S. 270, 463.

X X X

[Friedrich I の Reichslandfried (1152—1186) による Bauerntum 形成の契機であることが、この文には次回に譲る。]

## 保 險 商 品 說 の 研 究

庭 田 範 秋

### 一 商品とはなにか

マルクスの「資本論」が「資本制生産様式が支配的に行われる諸社會の富は一の『老大な商品集聚』として現象し、個々の商品はかかる富の原基形態として現象する」と云う有名な冒頭の文言をもつて、その研究が商品 (Die Ware) の分析から始められていることは、この「資本論」において展開される全研究過程が、その端初としての商品形態の、論理的かつ歴史的な自己發展の表現、規定および確認だと云う、豫見的な意味において、十分に注意される必要がある。「ブルジョア社會にとつては、勞働生産物の商品形態あるいは商品の價值形態が經濟的な細胞形態である」。商品生産の最高の發展段階である資本制社會では、「資本論」の敘述の出發點をなしている商品は、最も一般的な・最も捨象的な・生産關係を表わす。「資本論」はここから出發してより複雑な・より特殊な・より具體的な・生産關係を表わす貨幣、資本等々へ——それらの内面的な辯證法的發展關係に従つて——上向して進んで行く。しかしてまた

保險商品說の研究

商品は資本の原基的形態であるとともにその歴史的前提でもある。商品生産そのものの發展が辯證法的に行われ、その最高發展段階である資本制社會の經濟構造が、先行諸段階を自己のうちに基礎として取入れて、自己のうちに辯證法的にそれらを編成している。「商品は資本主義發生の出發點であり、資本主義の一般の特徴である」。これらの説明をまつて近代社會資本制社會の經濟的運動法則が暴露せられる。前掲「資本論」冒頭の一句において、近代社會の經濟的構造、運動を分析、暴露する研究の全過程の端極と端初、到達點と出發點とが對立の統一として鮮かに規定せられている。

「單純商品生産は、第一に、社會的分業を前提としている。そこで、個々の生産者はそれぞれ種類のちがう生産物をつくる」。すなわち商品生産は資本制生産よりも舊く、奴隸制度、封建制度下にも行われたが、封建制度の崩壊期には、單純商品生産は資本制生産の發生の基礎となつた。總ての、少なくとも大多數の生産物が商品の形態をとるのは資本制生産様式の基礎の上であり、生産物が商品として現われるには、直接的物々交換にその端を發する使用價值と交